metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
provided by Kanazawa University Repository

日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感

網谷　華、表　志津子[1)]、岡本　理恵[1)]、山田　裕子[2)]

要　旨

目的：日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性を対象に、家族との関係で抱く困難感を明らかにすることを目的とした。
方法：日本人男性を夫にもつ未就学児を養育するアジア系外国人女性 11 名にインタビューガイドに準じた半構造化面接を行い、質的記述的に分析を行った。語られた内容は意味のあるまとまりごとに抽出し、それらを要約してコード化し、コード間の共通性や差異性に注目して分類・統合しながら、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。
結果：分析の結果、日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感として、≪母国と異なる家事や子育て文化の違いへの戸惑い≫≪異文化の壁により表出できない本音≫≪日本人である義母の考えを優先≫≪受け入れてもらえない自身の価値≫≪夫と子どもへの期待を支えとしての日本での生活≫の 5 つのカテゴリーが見出された。
考察：養育期に、母親が外国人ゆえに、母国言語の伝承が許されず、家族から閉め出されたという思いをもつ事態は、母親の精神的ストレスや育児、家族内の人間関係にも影響するため、アジア系外国人女性が家族の中で尊重されることが大切であると考える。保健師などの支援者は、夫婦が相互に習慣や文化、価値観を理解し、尊重し合えるよう、他のアジア系外国人女性やその夫から話を聞けるような機会や日本人家族のアジア系外国人女性に対する態度を変える働きかけとして、異文化の理解ができるような場の提供を行うことも大切であると考える。

KEY WORDS

Asian women, international marriage, child rearing, family relationship, difficulty

はじめに

わが国における 2015 年の国際結婚数は約 2 万組であり、その中でも特に日本人男性とアジア系外国人女性の結婚が多く、国際結婚の約 60% を、日本の婚姻総数の約 2% を占める。一方で、同年における婚姻数に対する離婚数は、夫婦とも日本人または妻が米国、英国出身者の場合が約 35%であるのに対し、妻がアジア諸国出身者の場合は約 75%に及ぶ[1)]。このことから、日本人男性とアジア系外国人女性の結婚は、国際結婚の中では多いものの破綻するケースも多く、様々な潜在的な問題があると考える。

国際結婚者の適応と精神的健康に着目した研究では、欧米出身の妻よりアジア出身の妻の方が日本人男性との結婚を否定的に評価しており、その理由の一つとして、男女平等や家庭生活などについての価値観の違いがあげられた[2)]。また、育児期における日本人男性を夫にもつアジア系外国人女性の家庭内では、言葉の問題などの他に日本と母国とでの子育て方法や生活環境の違い、夫像の違いを感じていることが報告されている[3, 4)]。

また、日本人男性を夫にもつアジア系外国人女性と日本人家族との関係に焦点をあてた研究では、対話や共同作業など日本人家族と関わる機会が多ければ円滑な家族関係に繋がることや、母国と比べて日本人家族から得られる家事や子育ての支援が少ないということが報告されている[5, 6)]、が、子育て期におけるアジア系外国人女性が日本人家族との関係で抱く困難感に関しては明らかに

福井県奥越健康福祉センター
1）金沢大学医薬保健研究域保健学系
2）金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻博士後期課程

されていない。

来日後すぐに日本語が未習熟なまま出産や子育てを経験するアジア系外国人女性も多く存在すること[7]、また、未就学児を養育している在日中国人を対象とした研究においても、在日年数が少ないほどアイデンティティ喪失に関する育児ストレスが高いことが報告されており[8]、未就学児を養育中のアジア系外国人女性は日本の文化や言語に慣れないままに子育てをしている可能性が考えられる。そのため、本研究では、未就学児を養育しているアジア系外国人女性を対象として、日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感を明らかにすることを目的とした。

多くの保健師が母子保健事業で外国人への対応を経験しており[9, 10]、外国人母子支援事業として家族全体を視野に入れた支援の必要性を指摘している[11]。本研究は、アジア系外国人女性が自分たちの意思や文化を尊重されながら、異文化である日本の家族の中で安心して子育てが出来るように必要な支援を検討する資料となると考える。

用語の定義

1）アジア系外国人女性

本研究におけるアジア系外国人女性とは、アジア圏の国で出生し、母国の文化を習得した者を示す。

2）家族

Wright, L. M. らは、家族とは、強い感情的な絆、帰属意識、そしてお互いの生活に関わろうとする情動によって結ばれている個人の集合体であると定義している[12]。本研究ではこの定義に基づき、家族の範囲をアジア系外国人女性が密接に関わる夫、子ども、義父母と定義する。

研究方法

1．研究デザイン

半構造化面接を用いた質的記述的研究とした。

2．研究参加者

研究参加者は、A 県内に在住し、日本人男性を夫にもつ未就学児を養育するアジア系外国人女性 11 名である。参加者の条件は、国籍がアジア諸国である、日本で妊娠・出産・育児を経験している、現在未就学児を養育している、日本語による日常会話が可能であるとし、A 県内の国際交流協会より対象者の紹介を受け、研究参加に同意した者を研究参加者とした。

3．調査方法

インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接はプライバシーが確保されるように公共施設の一室もしくは研究参加者の自宅で行った。インタビュー内容は研究参加者の同意を得て録音し、録音に同意を得られない場合は、同意を得た上でインタビュー内容をメモとして記録した。また、口頭で意味が通じない場合は、筆談で言葉の意味を確認した。インタビューガイドの内容は、「お子さんが小さい時に夫や義父母はどのように関わってくれましたか」「夫や義父母の関わり方についてあなたはどう感じましたか」「あなたはどのような子育てをしたいと思いましたか」等であった。面接回数は 1 人 1 ～ 2 回であり、面接時間は 1 回につき 1 時間半～ 2 時間であった。調査期間は 2015 年 5 月～ 11 月であった。

4．分析方法

本研究では、アジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感を明らかにすることを目的としているため、現象を理解することを目的としている谷津の質的記述的研究の手法を参考にして分析を行った[13]。面接内容をテープから逐語録に起こし、逐語としたデータは、子育てを通して家族との関係で抱く困難感について語られた内容を意味のあるまとまりごとに分け、それらを要約してコード化した。コード間の共通性や差異性に注目して分類・統合しながら、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。真実性の確保のために研究参加者に分析結果を提示し、語りの意味と異なっていないかを確認した。また、研究の信頼性と妥当性の確保のために、データ収集および分析過程において専門家によるスーパービジョンを受けた。

5．倫理的配慮

対象者には研究の目的と方法について文書及び口頭で説明した。対象者の日本語力を考慮して文書はルビ付きのものを用意した。研究参加は自由意志によるものであり、同意しないことで不利益は一切生じないこと、一旦同意した後でもいつでも参加を取り消すことができること、個人情報は保護することを説明し、文書で同意を得た。面接の際には、同意が得られた者のみ内容を録音した。本研究は金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

研究結果

1．研究参加者の概要

研究参加者 11 名の国籍は中国が 6 名、フィリピンが 4 名、タイが 1 名であった。平均年齢は 32.8 歳（26 － 41 歳）、夫の平均年齢は 48.8 歳（39 － 69 歳）であった。滞日年数は平均 6.4 年（3 － 15 年）であり、1 人を除き来日して 10 年以内であった。婚姻年数は平均 7.3 年（4 － 16 年）であり、子どもの数は 1 人が 5 名、2 人が 5 名、3 人が 1 名であった。なお、本研究では、未就学

児を養育するアジア系外国人女性が対象であり、9 人は乳幼児のみを、1 名は幼児と前夫との子どもである成人を、1 名は幼児と小学生を養育していた。

義父母と現在同居している者が 4 名、来日時から別居している者が 4 名、来日時は同居していたが現在別居している者が 3 名であった。家庭での使用言語について 7 名はすべて日本語であり、4 名は時々母国語を使用していた。就労についてはありが 8 名、なしが 3 名であった（表 1）。来日理由は全員が結婚によるものであり、また、母国の家族とは、メールや Skype 等を用いて連絡を取り合っていた。

２．日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感

日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性（以後アジア系外国人女性と表記）が家族との関係で抱く困難感として≪母国と異なる家事や子育て文化への戸惑い≫、≪異文化の壁により表出できない本音≫、≪日本人である義母の考えを優先≫、≪受け入れてもらえない自身の価値≫、≪夫と子どもへの期待を支えとしての日本での生活≫という 5 つのカテゴリーが抽出された（表 2）。

文中の表記については、カテゴリーは≪≫、サブカテゴリーは【】で示す。「」は研究参加者の語りであるが、分かりにくい部分は ()中に言葉を補った。アルファベットは研究参加者の ID を示す。以下、カテゴリーごとに結果を説明する。

≪母国と異なる家事や子育て文化への戸惑い≫

3 つのサブカテゴリー【家事を自分 1 人でしなければならないことへの疑問】【子育ては親がする日本の文化への戸惑い】【理解されない母国の子育て法】から構成された。

【家事を自分 1 人でしなければならないことへの疑問】

アジア系外国人女性は、子育てをしながらも同居している家族の料理の準備や子どもの洗濯など家事のすべてをこなしている。中国では仕事も家事も夫婦の分担は半分ずつである。また、夫に家事を手伝ってもらおうとすると、義母から夫が家事をするのはダメだと言われることに対して疑問を感じていた。B さんは「ご飯作らんなんとか。洗濯物もせんなん…やっぱりあの時全部やらす。なんでこんなこと私しなければなりませんとか。気持ちおかしくなるんですよ、本当に。」と語っていた。

【子育ては親がする日本の文化への戸惑い】

子育てよりも仕事を重視する母国では、夫婦が働き祖父母が孫の世話をする。子どもの将来のために可能であれば、義父母に子どもを預けて早く働きたいとアジア系外国人女性は考えていた。また、日本の祖父母が孫の面倒をみることは少ないと感じており、義母が離乳食を作ってくれないことに対して理解できずにいた。

【理解されない母国の子育て法】

母国の文化に則って、祖父母に孫の世話をしてもらおうと中国の親に子どもを預けようとするが、夫や義父母に反対される状況であった。H さんは「フィリピンの場合は昔のような子育てやから、で、私の子どもでやってたら、ちょっと、これはダメだよって（義母に言われる）。で、私は何で（フィリピンの子育てをしては）ダメかなっ

表 1　研究参加者の概要

ID	国籍	年齢（歳）	滞日年数（年）	婚姻年数（年）	夫の年齢（歳）	子供の人数	義父母との同居経験	家庭での使用言語	就労
A	中国	34	9	10	42	2人	同居後別居	日本語（時々中国語）	なし
B	中国	31	7	7	47	1人	同居	日本語	あり
C	中国	41	6.5	7	66	2人	同居後別居	日本語	あり
D	中国	27	4.5	4.5	40	2人	別居	日本語（時々中国語）	あり
E	中国	31	4	5	42	2人	同居後別居	日本語	なし
F	中国	33	3	4	39	1人	同居	日本語	あり
G	フィリピン	37	15	16	69	1人	別居	日本語	あり
H	フィリピン	33	9	6	41	1人	同居	日本語（時々英語）	あり
I	フィリピン	35	6	6	55	1人	別居	日本語	あり
J	フィリピン	26	4.5	5	45	2人	同居	日本語	なし
K	タイ	33	6	10	51	3人	別居	日本語（時々タイ語）	あり

表 2　日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア人女性が家族との関係で抱く困難感

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
母国と異なる家事や子育て文化への戸惑い	家事を自分1人でしなければならないことへの疑問	家事を全部しなければならないのかと思うと気持ちがおかしくなった（B）
		1人で家事や子育てを全部していることをunfairと感じる（J）
		中国は仕事も家事も夫婦の分担は半分半分（D、E）
		夫が家事をしてはダメだと義母から言われてなぜダメなのかと思う（J）
		日本では家事を頑張っても感謝されない（J）
	子育ては親がする日本の文化への戸惑い	母国では夫婦は働いて祖父母が孫の世話をする（B、D、E、F、K）
		可能であれば子どもを義父母に預けて早く働きたい（E、F）
		義母が離乳食を作らないことに対して理解できなかった（D）
		日本に来たら祖父母が孫の面倒をみるのは少ない（D）
	理解されない母国の子育て法	祖父母が子育てをする母国の文化に則って中国の親に1年間子どもを預けることに対して夫や義父母に反対された（B、E）
		フィリピンの昔のような子育てはしてはいけないと義母に言われた（H）
		母国の文化に則って子どもを丸坊主にしたことを義父母に反対された時はなぜ全て自分で決めることができないのかと思った（D）
異文化の壁により表出できない本音	日本語で自分の思いを上手く伝えられない言葉の壁	子供を産んでから1年程はうまく伝えられずにイライラして一番辛かった（B）
		これをしたいと思っても言葉で伝えられないのでやりたいことが出来ない（H）
		うまく伝えられないので相手に誤解される（B、D、H）
		言葉でどう伝えるのか分からなかったので伝えることをやめた（B）
		夫や義母との間で1番の問題は言葉である（A、B）
	一人で抱えるやり場のない思い	イライラした時は自分の中で消化していた（B）
		夫は夜まで仕事なので自分の思いを伝えることができなかった（B）
		夫や義母に困っていることを言っても解決しないので自分が我慢する（J）
		一人で泣いても誰もあまり話をしてくれない（J）
		毎日義父母との関係や子どもの面倒、日本語の勉強で頭の中がいっぱいだった（B）
日本人である義母の考えを優先	行動を制約する義母の存在	仕事や外出をして良いかどうかは義母が決めるので自分は動物みたい（J）
		私は瓶に入っているような感じ(J)
		私が日本の生活に早く慣れるように部屋の片づけなどについて全部義母が決めていた（D）

（）内のアルファベットは研究参加者のID

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
日本人である義母の考えを優先	優先される義母流の子育て	義母に子どもに無理矢理離乳食を食べさせるのは可哀想だと言われ、離乳食をあげられなかった（B）
		義母が子どもの服を買うので自分の好きな服を子どもに着せられない（D）
		子どものことに関して義母の言う通りにしている（D、J）
		義母の助けをそこまで必要としていないことは義母本人には言えない（A）
受け入れてもらえない自身の価値	母国語の教育をしたい思いと認められない現実の葛藤	子どもには母国語も話してほしいのに日本語だけ話せれば良いと義父母に言われた時は怒った（B）
		子どもに教える言葉として英語は良いが、タガログ語はダメだと義母から言われて少しおかしいと思った（J）
		義父母が嫌がるので義父母の前では子どもと中国語で話さないように気を遣う（A、D）
		大きくなってから中国語は勉強させればいいじゃないかと義父母から言われたがそうは思わない（B、D）
		日本にいるのだから子どもには日本語を教えなさいと言う義母の考え方は古い（A）
		もう一つ言語を話せれば良いと夫だけは賛成してくれる（B、D）
	嫁として頼りにされない淋しさ	義母は私ではなく周りに相談するので私とは家族じゃないみたい（J）
		夫が日本人と結婚すれば義母はイライラしないのではないかと思う（J）
	容易でない母国への帰国	父母に会いに中国に帰る時は義母から嫌な顔をされる（A）
		毎年中国に帰るのはお金もかかり、義父母にまた帰るのかという感じにみられる（B、D）
		帰国する時は義父母から許可をもらう（D、J）
		義父母は私が帰国したらもう戻らないのかもしれないと心配している（D）
	断ち切られる母国との関係	義母は母国の家族のことを心配してくれない（J）
		子どもが母国語を話せないことで母国の家族と何も話せない（B、G、I、J）
		フィリピンの家族がお金で困っている時に助けてもらえない（J）
夫と子どもへの期待を支えとしての日本での生活	生活を支えてくれる夫の存在	夫が優しくなければ日本にいない（D、F、I、J、K）
		夫に日本語を教わらなければ日本で生活できない（G、K）
		役所からの通知は夫にみてもらわなければ分からない（E）
		夫以外には思っていることを何でも言えない（B、C、E、G、I、J）
		私は中国人で子どももまだ小さいので将来の生活が心配（C）
	日本の生活を留める子どもの存在	子どもが生まれるまでは辛かった（C、F、H、J）
		日本の家族や子どものために日本にいる（G、J、K）
		子どものために仕事を頑張らないといけない（F、H）
	日本で子どもの教育をすることへの期待	子どもの教育は日本でしたい（F）
		子どもとフィリピンに帰ったら子どもが学校に行けない心配がある（J）
		子ども達は今から勉強するのに私のわがままでタイに帰ったらもったいない（K）

て。どうしてダメだろうと思って、それは私のお母さん今までもやってたことやから。」と語っていた。

≪異文化の壁により表出できない本音≫

2つのサブカテゴリー【日本語で自分の思いを上手く伝えられない言葉の壁】【一人で抱えるやり場のない思い】から構成された。

【日本語で自分の思いを上手く伝えられない言葉の壁】

アジア系外国人女性は、日本語でうまく伝えられないことから出産後1年程はイライラして辛い思いを抱いていたり、なぜ私のことを分かってくれないかと感じたりするといった経験をしていた。Dさんは「私もそんなに日本語上手じゃないし、なんで私こう言ってる言葉理解（して）くれないし。たぶん自分も日本語上手ないし、言いたい言葉間違ってる日本語で。相手別の意味で考えてるかもしれない。」と語っていた。

【一人で抱えるやり場のない思い】

夫は仕事で帰りが遅いため、アジア系外国人女性は、イライラした思いを夫に伝えることもなく自分の中で消化していた。夫や義母に困っていることを相談しても解決できないので、自分が我慢するしかないと感じていた。

≪日本人である義母の考えを優先≫

2つのサブカテゴリー【行動を制約する義母の存在】【優先される義母流の子育て】から構成された。

【行動を制約する義母の存在】

アジア系外国人女性は、義父母との同居や別居でも義父母と近くで住んでいることで義母からの過干渉な働きかけがあった。仕事や外出をして良いかどうかは義母が決めるので、アジア系外国人女性は自分のことを動物みたいだと感じていた。Jさんは「私は瓶に入ってる感じ。結婚してこれもできないし、あれもできないし、（自分の世界が）広くなってないじゃない、狭くなってる気がする。」と語っていた。

【優先される義母流の子育て】

アジア系外国人女性は義母に子どもに無理矢理離乳食を食べさせるのは可哀想だと言われており、離乳食を子どもに食べさせることが出来なかった。Bさんは「（離乳食を）この味食べなかったら次の味やらせる、いろいろ試したけど結局食べんくて、食べれないだと（義母が）すぐ可哀そう、わーって言って、ミルクあげんなんって感じで、ずーっと言うとうるさい、分かったや作るわ、結局ミルクあげるし。ずーっと離乳食食べてない。3歳くらいになってから直接ご飯食べる（ことになった）。」と語っていた。

≪受け入れてもらえない自身の価値≫

4つのサブカテゴリー【母国語の教育をしたい思いと認められない現実の葛藤】【嫁として頼りにされない淋しさ】【容易でない母国への帰国】【断ち切られる母国との関係】から構成された。

【母国語の教育をしたい思いと認められない現実の葛藤】

アジア系外国人女性は、子どもには母国語も話してほしいと思っているが、義父母からは日本で住んでいるのだから日本語のみで良いと言われる経験をしていた。Aさんは「ご飯食べる？などの言葉を（子どもに）中国語で言うと（義母は）嫌な顔をするので、今は（義母の前では）中国語は話さない。」と語っていた。

【嫁として頼りにされない淋しさ】

義母は家族のことに関する内容をアジア系外国人女性ではなく近所の人達に相談していたので、アジア系外国人女性は、自分は家族ではないみたいだと感じていた。Jさんは「たぶんパパ（が）、日本人と結婚して（いれば）、お母さんがあまりイライラしないんじゃないかなと思って。」と語っていた。

【容易でない母国への帰国】

アジア系外国人女性が母国に帰る際には義母から嫌な顔をされ、また、毎年帰国するのはお金もかかるため、義父母にはまた帰るのかという感じにみられる状況であった。

【断ち切られる母国との関係】

アジア系外国人女性は義父母から母国の家族のことを心配されず、また、子どもが母国語を話せないために母国の家族と会話が出来ない状況であった。Gさんは「私がフィリピンに帰ったりしますから、たまに遊びに行く時もあるもんで、タガログ語も分かってほしい言葉、タガログの言葉も、勉強させたいなと思います。兄弟の子供達もお話しするようにその言葉も教えたいと思います、子供に、タガログ語。」と語っていた。

≪夫と子どもへの期待を支えとしての日本での生活≫

3つのサブカテゴリー【生活を支えてくれる夫の存在】【日本の生活を留める子どもの存在】【日本で子どもの教育をすることへの期待】から構成された。

【生活を支えてくれる夫の存在】

アジア系外国人女性は夫が優しくなければ日本にいないと感じていた。また、夫に日本語を教わらなければ日本で生活できないことや役所からの通知は夫に見てもらわなければ分からない状況であった。

【日本の生活を留める子どもの存在】

子どもが生まれるまでは生活が辛かったことや日本の家族や子どものために日本にいるなど親として頑張らな

ければならないという気持ちを抱いていた。Fさんは、「子どもがいない時の方が嫌だと思うことは多かったかな。」と語っていた。

【日本で子どもの教育をすることへの期待】

アジア系外国人女性は、子どもの教育は母国ではなく、日本で受けさせたいことや母国では子どもの教育が受けられない心配があるという気持ちを抱いていた。Kさんは「日本の教育とかなんとか、子どものため。日本の方がいいです。教育とかマナーとかが勉強とか。大学に、皆3人大学行くのに、私日本（で）頑張りたい。」と語っていた。

考察

考察では、本研究で抽出されたカテゴリーをもとに、1．アジア系外国人女性であることによる困難感、2．文化が異なることによる困難感、3．日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性への支援について論じる。

1．アジア系外国人女性であることによる困難感

アジア系外国人女性は≪受け入れてもらえない自身の価値≫という思いを感じていた。アジア系外国人女性は【母国語の教育をしたい思いと認められない現実の葛藤】を抱えており、子どもに思うように母国語を習得させることが難しい状況にあった。

子どもにとって大きな問題となるのは、母親の母国語を忘れてしまうことであり、家庭で母国語を意識的に使用しないと、成長するにつれ母国語を忘れ、親との意思疎通を欠き、時に母国の文化を恥じ、親子間での文化的なギャップに苦しむ姿があると言われており[14]、言葉の問題は子育てや母親としての自尊心にも大きな影響を及ぼしていると述べられている[15]。

中澤[16]によると、農村におけるアジア系外国人妻の7割以上が子どもに母国の文化や言葉を教えたいと考えているが、一方で、日本の家に嫁いだのだから、子どもを日本人として育てるように強要される場合もあるという報告もある[17]。しかし、義父母に日本人として育てるように言われることから、アジア系外国人女性が子どもに母国語を習得させることができない状況にあることは石河の事例報告[17]のみであり、本研究においてその実態を明らかにすることができた。

アジア系外国人女性は【嫁として頼りにされない淋しさ】を抱いていた。日本人男性を夫にもつフィリピン人女性は東南アジア出身であるため家族から侮蔑的対応を受け自ら「歓迎されない存在であることを認識」していたと報告されており[18]、本研究における研究参加者も同様な思いを抱えていることが見出された。

家族看護学の家族発達理論および家族システム理論の見地からは、一般に養育期には育児の方法や育児協力をめぐって家族成員間での意見の対立や、一部の家族員が閉め出されたように感じ、家族の絆が一時的に弱まっていくといった変化がある[19]。そこを乗り越えながら、家族は家族として形成されていくのである。この重要な養育期に、母親が外国人ゆえに、家族から閉め出されたという思いをもつ事態は、母親の精神的ストレスを増し、それは育児そのものにも影響し、育児がうまくいかないことによってさらに家族内の人間関係も悪化するというように悪循環を繰り返す。このことは家族崩壊にもつながる。それゆえに、養育期にアジア系外国人女性が家族の中で尊重されるように、調整していくことが大切であると考える。

2．文化が異なることによる困難感

アジア系外国人女性は【日本語で自分の思いを上手く伝えられない言葉の壁】や【一人で抱えるやり場のない思い】を経験し、≪異文化の壁により表出できない本音≫を抱えていた。星野ら[4]は、中国人とフィリピン人を対象とした研究において、来日直後は夫や日本人家族など最も身近な家族と十分なコミュニケーションが成立しなかった状況であったことが伺われると報告している。また、伊藤[15]は言語的に十分な疎通が図られていない場合、夫婦の間で問題の顕在化が遅れ、その問題を一人抱え込むことになるのは外国人妻であると述べている。本研究における研究参加者も同様に、言葉という異文化の壁により、日本人家族に自分の気持ちを表出できずに本音を自分の中に納めていた。

また、アジア系外国人女性は≪母国と異なる家事や子育て文化への戸惑い≫を感じており、その中でも【家事を自分1人でしなければならないことへの疑問】を抱いていた。星野ら[4]は、中国人とフィリピン人を対象とした研究において、母国での家事育児を分担する夫像に比べ、封建的で何もしない日本人男性への不満があることを報告している。また、川崎ら[20]の中国人女性を対象とした研究においても、日本での育児に関して夫婦対等の役割であるという中国の夫婦のあり方に関する認識と違いがあることが報告されている。本研究における研究参加者も夫や義父母などの家族から家事や子育ての支援を得やすい母国と比べて、夫や義父母からの支援を得にくい状況に戸惑いを感じており、これまでの報告と類似した結果であった。

3．アジア系外国人女性への支援

乳幼児の子どもをもつ在日外国人に対して、保健師は家族を巻き込みながら支援していることが報告されている[21]が、一方で、外国人母子に対する保健師の対応が

困難な事例として「家族関係」が一番多く挙げられているという報告もある[11]。保健師などの支援者がアジア系外国人女性を理解する際、アジア系外国人女性が家族から自身の価値を受容してもらえない状況であることを踏まえて支援することが重要であると考える。

社会的文化的属性が異なる者の結婚には困難な側面もあるが、多様な文化の尊重、夫婦間のジェンダー的な平等、異文化間に育つ子どもの豊かな可能性など新しい家族像を指し示す可能性があり、また、異なった文化への理解は外国人配偶者を人として尊重することに繋がり、家事の分担はジェンダー平等・フェアな感覚を生み出すと言われている[22]。夫婦が相互に習慣や文化、価値観を理解し、尊重し合えるよう、日本人男性を夫にもつ子育て中の先輩アジア系外国人女性やその夫婦から話を聞けるような機会を設けることが大切である。また、夫である日本人男性が家庭での性的役割分業を再考できるよう、家事・育児の分担について互いに話し合いができるような場を設けることも必要である。

さらに、アジア系外国人女性の中には、日本人のアジア人に対する蔑視感情を感じている者もおり[2]、アジア系外国人女性の尊厳にかかわる問題として、日本人家族の認識を変える働きかけが必要である。具体的に、日本人家族が異文化を理解できるよう、アジア系外国人女性の文化や背景、宗教などを学習する場を提供することが大切であると考える。

4．研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は11名であり、日本語教室や国際交流サロンなどを利用して地域社会と繋がっている者であったこと、また、参加者の母国が3ヶ国に絞られたことから、すべての日本人男性を夫にもつアジア系外国人女性に適用することはできない。今後は、対象者の地域を増やし、夫や義母などキーパーソンとなりうる他の家族員をも対象とした研究が必要である。

結語

日本人男性を夫にもつ子育て中のアジア系外国人女性が家族との関係で抱く困難感として、≪母国と異なる家事や子育て文化への戸惑い≫、≪異文化の壁により表出できない本音≫、≪日本人である義母の考えを優先≫、≪受け入れてもらえない自身の価値≫、≪夫と子どもへの期待を支えとしての日本での生活≫という5つの困難感が見出された。

保健師などの支援者は、夫婦が相互に習慣や文化、価値観を理解し、尊重し合えるよう、他のアジア系外国人女性やその夫から話を聞けるような機会や日本人家族のアジア系外国人女性に対する態度を変える働きかけとして、異文化の理解ができるような場の提供を行うことが大切であると考える。

謝辞

本研究を行うにあたりご協力くださりました、対象者の皆様、日本語教室の先生方、国際交流協会の皆様に心よりお礼申し上げます。尚、本稿は金沢大学大学院医薬保健学総合研究科提出の修士論文の一部に、加筆修正を行ったものである。

文献

1）総務省：平成 27 年人口動態調査　夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数.【オンライン，https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001157966&requestSender=dsearch】2015（アクセス 2017 年 4 月 16 日）
総務省：平成 27 年人口動態調査　夫妻の国籍別にみた年次別離婚件数及び百分率.【オンライン，https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001157967&disp=Other&requestSender=dsearch】2015（アクセス 2017 年 4 月 16 日）
2）鈴木一代：国際結婚者の適応と精神的健康－異文化出身の妻の場合－，研究助成論文集 42:76-85, 2006
3）吉田真奈美、春名めぐみ、大田えりか、他：在日フィリピン人母親が子育てで直面した困難と対処，母性衛生 50(2):422-430, 2009
4）星野明子，庄司優子，大戸さとみ，他：在日外国人の母親の子育て不安に関する研究，北日本看護学会誌 1(1):9-16，1998
5）蛎崎奈津子：農村にて国際結婚をした中国人女性の妊娠・出産時期における家族関係構築プロセス，日本看護研究学会誌 32(1):59-67，2009
6）李剣，木村留美子，津田朗子：在日中国人母親の子育てとその家族からの支援の特徴に関する研究，金大医保つるま保健学会誌 39(1):109-117，2015
7）桑山紀彦：「外国人花嫁」の適応状況と課題，日本社会精神医学会雑誌 4(1):72-75，1995
8）楊文潔，江守陽子：在日中国人母親の育児ストレスに関する研究，日本プライマリ・ケア連合学会誌 33(2):101-109，2010
9）奥野ひろみ，五十嵐久人，成田太一，他：長野県内市町村保健センターにおける在日外国人母子への支援に関する研究，小児保健研究 71(4):518-525，2012
10）橋本秀美，深堀浩樹，伊藤薫：三重県保健師の在日外国人への保健活動，三重県立看護大学 14:19-26，2010
11）歌川孝子，丹野かほる：在日外国人母の子育て支援の現状と課題－市町村保健師を対象とした実態調査から－，こころと文化 11(1):81-87，2012a
12）Wright, L. M., Watson, W, L., Bell, J. M.: Beliefs-The Heart of Healing in Families and Illness, Basic Books, New York, p 45, 1996
13）谷津裕子：Start Up　質的看護研究 (2)，学研，pp 103-154, 2010
14）李節子：在日外国人の母子保健－日本に生きる世界の母と子－，医学書院，pp 109, 1998
15）伊藤孝惠：国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する問題背景―外国人妻を中心に―，言語文化と日本語教育 33:65-72，2007
16）中澤進之右：農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識―山形県最上地方の中国・台湾、韓国、フィリピン出身者を対象にして―，家族社会学研究 8:81-96，1996
17）石河久美子：異文化間ソーシャルワーク，川島書店，pp 45・49，2003
18）歌川孝子，丹野かほる：在日フィリピン人母の子育てにおける異文化適応過程に関する研究，母性衛生 53(2):234-241，2012b
19）鈴木和子，渡辺裕子：家族看護学理論と実践，日本看護協会出版会，pp 154，1995
20）川崎千恵，麻原きよみ：在日中国人女性の異文化における育児体験―困難と対処のプロセス―，日本看護科学会誌 32(4):52-62，2012
21）大野麻美，北山秋雄：長野県 I 地域における乳幼児期の子どもをもつ在日外国人に対する保健師の支援，日本保健福祉学会誌 21(1):57-65，2014
22）佐竹眞明，金愛慶，近藤敦，他：多文化家族への支援に向けて－概要と調査報告－，名古屋学院大学論集 51(4):49-84，2015

Difficulty in the family relationship of Asian women married to Japanese men during child rearing

Hana Amitani, Shizuko Omote[1)], Rie Okamoto[1)], Yuko Yamada[2)]

Abstract

Objectives: This study was performed to clarify difficulties in family relationships of Asian women married to Japanese men in relation to child rearing.

Methods: We collected data through semi-structured interviews from 11 Asian women married to Japanese men while rearing pre-school-age children. Using the recorded content, codes were created for statements. Subcategories were established from the codes, and categories were created from each of the subcategories.

Results: Five categories of difficulties experienced in the family relationships were as follows: they were bewildered at cultural differences with regard to child rearing and housework; they felt that they could not show their real feelings because of consciousness of cross-cultural barriers; they have to obey the instructions of their Japanese mother-in-law; their Japanese family does not accept their values; they can live in Japan only for the sake of their children and husband.

Discussion: In the child rearing period, when a woman feels that her mother has been excluded from her family's language because of her foreign nationality, and her family is locked out, this has a negative effect on her mental well-being, parenting, and family relations. It is important that foreign Asian women are respected in their families in Japan. To gain an understanding and respect for each other's habits, cultures, and values, it is important to provide opportunities to hear from other Asian foreign women and their husbands and develop ways to change Japanese families' attitudes toward foreign Asian women in Japan.